

【報告】

三宅義子先生記念

日韓近現代史の視点で歩く岩国歴史散歩

藤目 ゆき

2014年11月28日、アジア現代女性史研究会と大阪大学人間科学研究科の多文化共生社会論ゼミの共催で、岩国市内においてフィールドワーク「三宅義子先生記念 日韓近現代史の視点で歩く岩国歴史散歩」を行いました。参加者は大阪から4人、京都から2人、山口県の萩市から1人、下関市から1人、そして、嬉しいことに岩国市在住の4人の方々も参加して、土地案内を引き受けてくださいました。

米軍再編計画の重大な焦点となった岩国。住民からの根強い反対の声をよそに、極東最大級の米軍基地へと増強されようとしている岩国基地。騒音・環境破壊・米軍犯罪といった基地を抱える自治体に共通の苦悩を背負わされている岩国。私たちは以前から、そんな基地の街・岩国の現在を見つめてきたのですが、今回は特に「歴史散歩」と銘打ち、愛宕山付近と錦帯橋・岩国城付近を中心に、岩国の過去に思いを馳せることのできる歴史的な場所を探訪しました。

私たちの歴史散歩のキーワードは、「日韓近現代史の視点」です。岩国米軍基地は朝鮮戦争を契機に拡張され、その後も常に「朝鮮有事」に備える在日米軍の重要基地として増強されてきました。平和を希求する韓国の人々が岩国の基地問題に関心を寄せるのは、この基地がかつての朝鮮戦争における米軍の出撃基地であり、朝鮮戦争停戦後もなお朝鮮半島の緊張を高める役割を果たしてきた歴史事実を重く見ているからでしょう。私たちは、

戦前の植民地支配、戦時動員、第二次世界大戦後の朝鮮戦争、今日に続く朝鮮半島の分断と緊張という日本と朝鮮半島の不幸な関係性を終わらせ、真の平和と友好の関係が日本と南北朝鮮の間に築かれてゆくことを願ってやみません。そのような願いから、今回のフィールドワークでは「日韓近現代史の視点で歩く」ことを強く意識したわけです。

ここに私たちの歴史散歩の記録をまとめ、訪ねた場所の写真・地図などもあわせて紹介します。



岩国城・錦帯橋付近

歴史散歩の出発点は、錦帯橋の近くの駐車場。ここに参加者が集合してから最初に訪ねたのは、錦帯橋の近くの紅葉谷公園にある六角亭です。岩国の歴史散歩を思い立った一つのきっかけが、この「六角亭の返還問題」が話題になっていることでした。六角亭はもともと朝鮮の碧蹄館（碧蹄館は朝鮮戦争で消失したが、碧蹄館跡は韓国高陽市徳陽大慈洞に史跡として保存されている）にあった朝鮮の文化財で、日本による武断統治時代に朝鮮総督・長谷川好道が自分の故郷である岩国に搬入したと伝えられています。その六角亭について、近年、韓国の高陽市から返還を求める声が出ているということです。

侵略戦争や植民地支配を背景に収奪された美術品や建造物といった文化財を原産国に返還するという問題は、大英博物館所蔵のロゼッタ・ストーンやナチスによる略奪品などをはじめとして世界的に注目され、国際的に高い関心が払われてきた問題です。日本と韓国との間でも文化財返還問題は懸案となる外交課題のひとつであり続けています。岩国の六角亭もそのような文化財返還問題のひとつとして浮上しつつあると知り、これまで岩国を訪れても六角亭をそれと意識して眺めたことのなかった私たちは、ぜひ自分たちの目で六角亭を見、その来歴を知りたいと思いました。とくに、フィールドワークの事前学習をする過程で、この問題をめぐってすでにインターネットの一部にはいわゆる「嫌韓系」のヘイトスピーチが出てきていることに気づき、多文化共生社会論の観点からも注視する必要があると考えました。

2014年2月26日の岩国市議会第1回定例会で田村順玄市議は、岩国市が「中国杭州市との姉妹縁組10周年を記念するモニュメント建設」に取り組んでおり日中友好の促進が期待されていることにふれつつ、「同様に、日韓の友好親善を促進するためにも、今回の六角亭をそのシンボルと捉え、懸命な解決策を模索するべきだと思います。そして、これを契機に、高陽市との交流が一層高まることを願っております」と発言しておられます。私たちはそのような田村市議の提起に共感し、現代史学と多文化共生社会論の両方にとって重要なテーマと考えて、六角亭を訪ねたのです。

実際に見てみた六角亭は鮮やかな紅葉の中にある手入れの行き届いた美しい建造物で、感動的でした。市民の憩う場・観光客の人気スポットになるのもっともだと領けました。紅葉谷公園に設置された六角亭の案内板には、こんな説明があります。

「六角亭は、古くから韓国各地において身分の高い人々が、景観の良い場所に建て憩いの場所として利用されていたものだと思います。この地にあります六角亭は、韓国京畿道碧蹄館（京城「現在のソウル」の北約20キロメートルの地点にある地名）付近にあったもので1918年に到来したものであるといわれています」



紅葉谷の六角亭

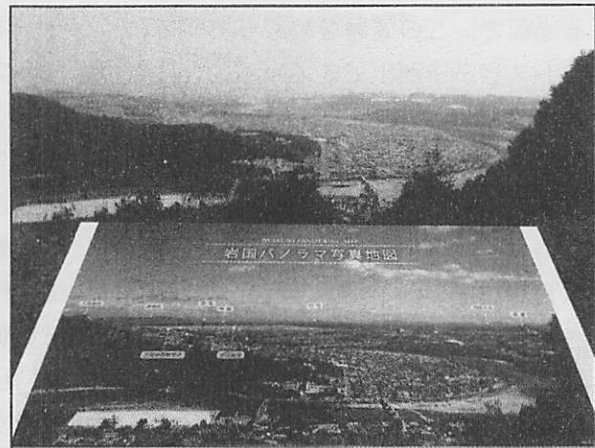


歴史散歩前後の調査によって、この案内板は岩国に暮らす在日韓国人1世の方たちが製作し、岩国市に要望して設置することになったのだと知りました。「到来」という表現は微妙です。日本人がこの表現を使うと、「(朝鮮から)贈られた」という根拠のない表現より良いのは確かですが、建造物が自分で歩いてやって来たわけではないのですから、「到来」の背景にある植民地支配の責任をあいまいにしているような印象にもなるでしょう。

が、六角亭の案内板については、そこに在日1世たちの、祖国に由来するこの六角亭を大切に作る愛情がこめられていたということです。在日の1世、2世の女性たちが清掃のボランティアを市に申し入れたりすることもあったそうです。

六角亭の後は、駆け足で岩国城（ロープウェイからの眺望は抜群です一写真右）と錦帯橋を眺め、錦帯橋の近くにお住まいの大川清牧師（住民投票の成果を活かす岩国市民の会 代表）をお訪ねしました。

（そのときのお話は 83～84 ページに掲載しています—編集者注）



愛宕山地区

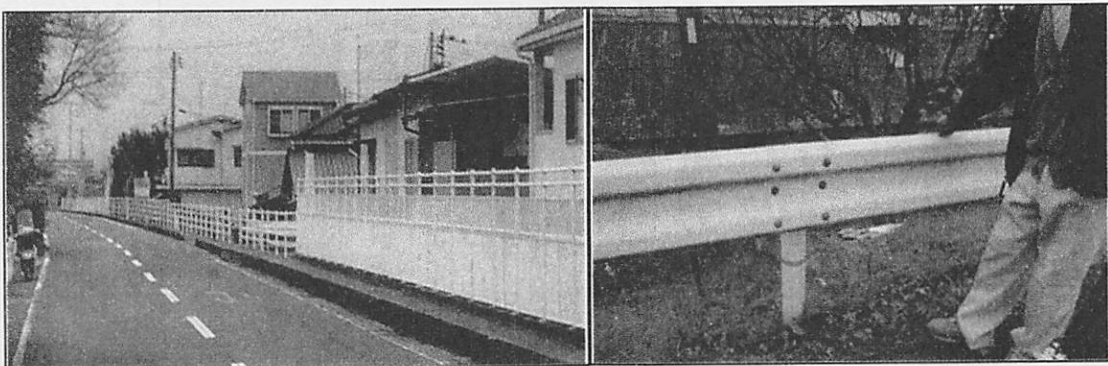
続いて向かったのが愛宕山地区です。歴史散歩を思い立ったもう一つのきっかけは、愛宕山地下壕を埋めてしまう国の方針が報じられたことでした。

愛宕山は岩国の「戦争と平和」を体現しています。第二次世界大戦下の愛宕山には日本軍の戦闘機を製造する兵器工場として秘密地下壕が建設されました。この地下壕は、戦時下の子どもや女性の勤労働員、朝鮮人や中国人の強制連行といった歴史を語る戦争遺跡でもあります。他方、戦後の愛宕山は、米軍基地拡張のための土砂採掘が始まるまでは市民が四季折々に豊かな自然を楽しみ、お祭りやピクニックなどで親しむ平和な里山でした。が、今では基地のための土砂採掘で山頂が削りとられ、地域で大切にされていた鎮守の森も消えてしまいました。土砂採掘跡地は「21世紀型多機能未来都市にする」という県の地域住民への約束は反古にされ、この土地を買い取った国はここに米軍住宅を建設しつつあるのです。そして今、その愛宕山の地下壕を近く国が埋没させてしまう、というわけです。

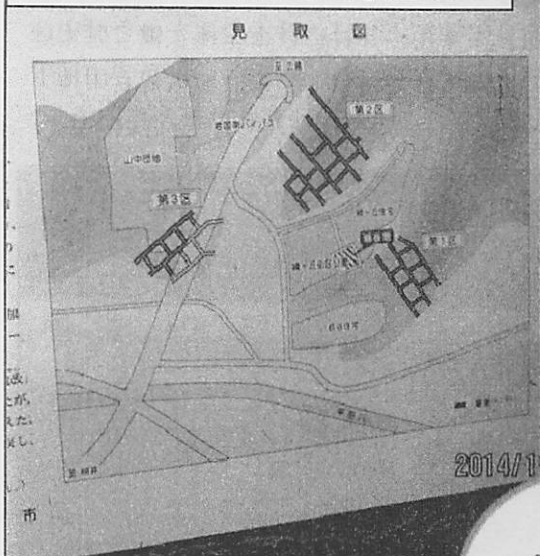
戦争の愚かさや罪深さを今日に伝える戦争遺跡たる愛宕山地下壕が消されつつあることと、愛宕山が米軍に提供され、子や孫に平和な故郷を残したいという地域住民の願いに冷水が浴びせられているということとは無縁ではありません。今日の日本全体を覆う歴史健忘症と軍事主義への急激な傾斜に危惧を抱きつつ、埋没させられてしまう前に愛宕山地下壕を、一部だけでも、しっかりと目に焼き付け記憶しておきたいと私たちは考えたのです。



大川牧師宅から愛宕山地下壕跡に向かうまでに、ぜひ訪ねたい場所がありました。2010年9月に米軍人が運転する車に轢かれて命を落とされた、牛野谷地区の自治会長で「愛宕山を守る会」の会員であった恩田美雄さんの遭難現場です（地図参照）。岩国の軍事化は、市民の生命と暮らしを脅かし続けています。戦争・軍隊の脅威は岩国では「過去」に過ぎ去った物語ではありません。米軍の事故や犯罪によってこれまで多数の市民が被害を受けてきました。命を落とした被害者も少なくないのです。恩田さん（当時 66 歳）の死は近年発生した事件の一つです。この事故を引き起こした米軍属を日本の検察は不起訴にし、遺族からの検察審査会への審査申し立ては二度にわたって却下されています。米軍では基地内の交通裁判でこの軍属の有罪を認定したものの、4か月間の運転制限を行っただけ（しかも通勤に車を使用することは許可）でした。私たちは全員で恩田さんの遭難現場に献花し、黙祷を捧げました（写真右上）。見晴らしの良い道路にたち、近隣の人から事故当時のことを聞かせていただくことができたので、事故が起きた状況がいっそうリアルに理解できました（写真右下）。特に、かねてから恩田さんは自治会長として米軍車の無謀運転を心配しており、地域の子どもたちを守るためにフェンスにネットをとりつけるなどの取り組みをしておられたと知り、言葉を失いました（写真左下）。



緑ヶ丘公園にある地下壕の見取り図



第2区
地下壕
入口



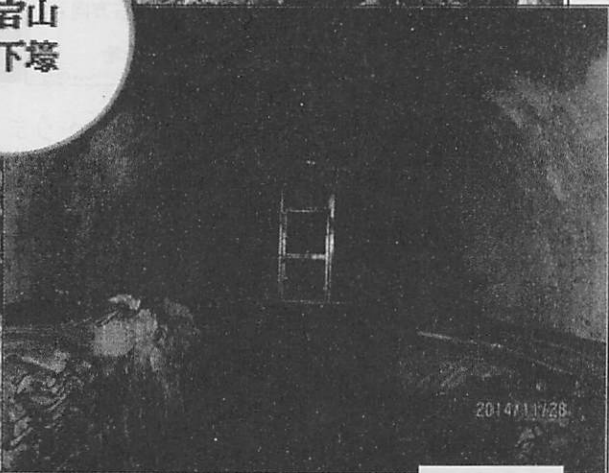
愛宕山
地下壕

第3区
地下壕
入口



2014/11/28

▲第1区
住宅の庭
にある地
下壕入口



愛宕山地下壕跡に到着するや、大雨が降りだして慌てました。それでも田村市議やコープの平和活動で地下壕の調査にも取り組んできた岩国在住の皆さんのおかげで、雑草が生い茂る中を歩き地下工場のトンネル入り口にたどりつきました。また、民家の敷地にある入り口から地下壕の内部を見ることができました。大雨の中、熱心に解説して下さった岩国の皆さん、本当にありがとうございました！ おにぎりもおいしくいただきました！

愛宕山地区では、龍門寺と朝鮮民族学校跡地をも訪ねました。第二次世界大戦前、植民地支配を背景として朝鮮半島から多くの人々が渡日し、日本敗戦までに岩国にも多数の朝鮮人男女が流入しています。特に戦時下には愛宕山地下壕その他の軍需工事に関連して多数の朝鮮人が過酷な労働に従事したのです。日本敗戦後、在日朝鮮人運動が高揚し、岩国にも民族学校



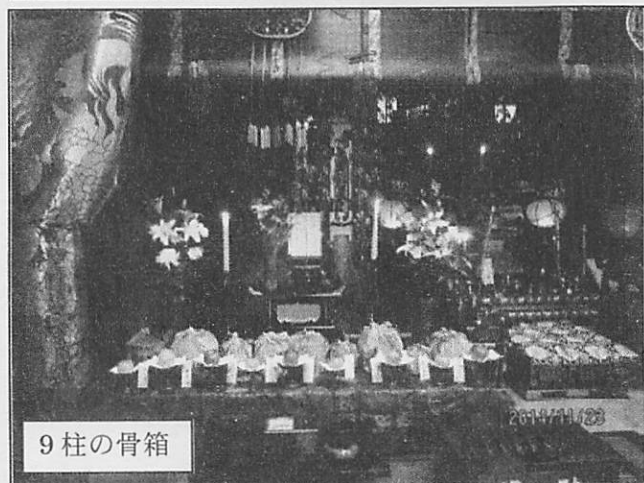
民族学校があった場所

が設立されましたが、惜しまれながら 1978 年には閉校したということです。

龍門寺は高野山真言宗のお寺です。門徒の中には朝鮮半島を故郷とする方も多くおられるそうです。御住職は故郷を遠く離れた岩国で亡くなった朝鮮人の遺骨九柱を預かり、菩提を弔っておいでになりました。「強制連行真相調査団・山口」の事務局長・金静媛さんと田村市議のご協力を得てこの龍門寺を訪ね、御住職のお話を伺い、慰霊の法要に参列できたことは私たちにとって本当に貴重な経験になりました。



追悼法要



9柱の骨箱

民族学校跡地を訪ねた後、焼き肉料理店「おいしんぼ」で食事会・交流会をして、歴史散歩は終了しました。翌日 11 月 29 日には関西からきた 6 名、萩・下関からきた

2名でシティホテル安藤で研究会をし、金静媛さんに講演もしていただきました。そのときに、歴史散歩の報告をまとめる相談をし、7か月後の今、ようやくその報告を公にすることができました。

わずか1日だけの歴史散歩では、第二代朝鮮総督・長谷川好道の生家跡や作家・宇野千代の生家跡をはじめ、時間切れで訪ねることのできなかった場所も多々ありました。それでもこの歴史散歩を通して、これまで抽象的なイメージでしかなかったことや意識していなかった多くのことを知り、考える機会を得ることができ、現代史・多文化共生社会論の両面から重要な研究課題が多くあることを改めて気づくことができ、幸いでした。

ご協力いただいた方々にあらためて感謝しています。





日本キリスト教団岩国教会牧師、
「住民投票の成果を活かす岩国市民の会」「米兵の
犯罪を許さない岩国市民の会」代表

私は、岩国教会にやってきて 16 年になります。その前は北海道にいました。反基地運動をしようとして岩国に来たわけではありません。岩国に来て以来、見聞きする事は信じられないことばかりです。日本は法治国家のはずなのに、人間性を踏みじめる爆音、事件・事故が跡を絶ちません。

孤立する事が、一番つらい事です。2006 年に空母艦載機が移駐するとの話になり、当初は市議会も全会一致で反対していました。空母艦載機の受け入れの是非を問う署名も、6 万筆が集まりました。しかし、だんだん意見が乖離していきました。「国が決めることだから…」「振興策が貰えなくなるのでは…」そのような状況下で、2006 年 3 月 12 日の住民投票を迎え、私たちは「今声を出さなければ、生涯後悔する事になる」と活動を始めました。住民投票には、50%条項と言う投票率が半数を超えなければ開票もされないという高いハードルがあります。岩国市では、住民投票のボイコットを呼びかける運動もありました。しかし、沖縄や厚木からの応援があり、特に厚木は、空母艦載機が岩国に行くことで、住民の方たちは喜んでいるのではないかと思っただけに、そうではないと分かり勇気づけられました。投票結果は、はっきりと「否！」の意思を示したことで、とても大きな力・原点となりました。

その後の国のやり方はすさまじいものでした。本来なら、市民がおり、町がある。本来なら、市民が自分達のあり方を決め、それを応援するのが国の役割ではないでしょうか。しかし、実際はそれを応援するのではなく、国策に反対しようものなら金と圧力でもってズタズタにするのです。「国が、国が」と言いますが、国の主体は私たちです。決してあきらめるのではなく、声を上げ続けたいといけません。

犯罪や爆音も問題ですが、愛する街が戦争の拠点にされるということは、被害者でもあり加害者でもあるということです。最近、『ファルージャ』という映画を観ましたが、米兵たちの戦闘機の先に何があるのか、犠牲になるのは市民たちであるという想像力が必要です。

基地の街で生きる以上、社会と信仰を分けることはできません。基地の問題は、生活・命の問題です。イエスさまは、生活、命にかかわってくださります。運動の中にイエス様もいてくださります。聖書の中に、「平和を作り出す者は幸いである」という言葉があります。

安倍政権の動きはすさまじいものがあります。広島慰霊碑に、「安らかに眠って下さい 過ちは繰返させぬから」とありますが、被爆者の方々が安らかに眠ってられるよ

うな時代ではありません。声を上げなければ、また過ちを繰り返してしまいます。広島では地震が頻繁に起こっています。あるジャーナリストの方が、「今脅威なのは軍事的テロではなく、自然の脅威である」と書かれています。世界の国々は、人殺しの為に競っている場合ではありません。

イザヤの預言には、「主は国々の争いを裁き、多くの民を戒められる。彼らは剣を打ち直して鋤とし／槍を打ち直して鎌とする。国は国に向かって剣を上げず／もはや戦うことを学ばない。（イザヤ書 2 章 4 節）」とあります。ニューヨークの国連本部にも刻まれています。イザヤのこの言葉は、3000 年前に言われたものですが、そこに希望をおきたいと思います。

沖縄の友人は、挨拶で「明暗が尽きた時になお明暗がある。それはあきらめないことだ」と言っていました。沖縄の知事選以降、岩国の基地がその分拡張されていくことでしょう。沖縄と共に頑張っていきたいと思います。あきらめず、粘り強く、それしかありません。弱い人間なので、限界があります。全国から応援があることに希望を感じています。出会いの中で、人間は変えられていき、変わっていくと思います。

◆このお話は、2014 年 11 月 28 日に、岩国歴史散歩参加者が岩国教会を訪れた際の大川牧師のお話を、アジア現代女性史研究会が聞き取りまとめたものです。

参加者の感想

岩国は、「町に歴史あり」を実感させられる所です。錦帯橋の向こうには城下の名残があり、日本軍が造った飛行場は、今や米軍基地になっています。あの橋の架け替えや補修のために岩国藩は身分階級を問わず税を徴収していたにもかかわらず、武士や一部の商人以外が渡れるようになったのは明治になってからだそうです。米軍基地と同じだなと思いました。「思いやり予算」で米軍が使っている場所は、いつになったらだれでも自由に住んだり通ったりできる場所になるのでしょうか。

ぜひ訪ねて、話を聴いてほしい場所があります。小さな子どもも含め、戦争中に亡くなった9名の朝鮮人の遺骨を預かっている龍門寺です。山口県は、戦争中に強制動員された朝鮮人の人数が全国で4番目に多い県です。どれだけの人々が犠牲になったことでしょうか。故郷に帰れず、墓標もない人々を生み出したこの国の歴史を、戦後70年経っていても、考えなければいけないと思いました。

山と川と海に囲まれて拓がる岩国は、空が広く、自然に恵まれたいい所です。ここに、「軍事都市岩国」は似合いません。
(中川加代子)

わたしは、2008年から毎年岩国を訪れ、米軍基地の周囲をフィールドワークしたり、米軍基地反対の国際集会に参加したりしてきました。しかし、普通遠方から岩国を訪れた人が行くような所へは、錦帯橋を除いてほとんど行ったことがありませんでした。その意味でも、岩国の様々な場所を訪問したことは、とても新鮮でした。

愛宕山の地下壕跡は、中でも印象的でした。スーパーの裏、民家の納屋の後ろや敷地の中に、戦時中に作られた地下壕の跡が生々しく残っていることに驚きました。戦時中は戦闘機をつくるための工場として利用され、戦後は米軍基地の滑走路移設の土砂を得るために崩されてしまった愛宕山は、戦時中も戦後も戦争と密接につながってきたのだと思います。このような重要な歴史の証人であり遺産であるものを、切り崩し、埋めたててしまうことで、歴史が隠されてしまうかのように感じます。

今回、岩国を訪れる前の事前学習を通して、山口県は強制連行された朝鮮の人々が多く居住していた地域の一つであるということを初めて知りました。愛宕山の地下壕も、そのような人々が働かされた場所の一つです。愛宕山跡地を見学した後で、龍門寺と岩国の民族学校跡地を訪れることで、今まで自分の住む地域に在日の人たちが住んでいることや、全国各地に民族学校があることは知っていたけれど、全国津々浦々の、労働者が過酷な労働を強いられていたとされる場所では、歴史遺産の案内板には書かれていなくても、常に朝鮮人労働者も（より過酷な条件で）働かされていたのだと改めて認識しました。

(熊野沙織)

沖繩以外で大阪より西の地方には足を踏み入れたことのなかった私にとって、今回の岩国歴史散歩への参加は、その事前準備も含め、すべてが新しい新鮮な経験となりました。その中でも印象的だったのが、岩国教会の大川清牧師を訪ねたことです。大川牧師は自分たちの町が戦争の拠点となっていて、「自分たちは被害者と同時に加害者でもある」とお話しされていました。自分の住んでいる町の一部が米軍に占拠されているだけでなく、さらにそこから他の国に派遣されている米兵たちが、多くの人々を傷つけ、命を奪っている現実。このことに地元の方が責任を感じさせられていることもまた、基地のもたらす目に見えない問題であると考えさせられました。岩国をはじめとする一部の地域に基地を押し付けている私たちは、基地問題を抱える地元の人々と、その基地と関係している戦争の両方に、重い責任を負っており、二重の意味で加害者ではないかと思えます。ぜひ、多くの方々、とくに私たち学生と同年代の人たちに岩国を訪れていただき、この問題が決して他人事ではないのだということを知っていただきたいです。

(渡辺真由子)

いちばん印象深かったのは、やはり初めて訪れた旧日本軍地下壕（愛宕山）と龍門寺での法要でした。雨の中を、岩国朝鮮人強制連行問題調査活動をされた田村順玄さんと金静媛さんが案内して下さり、住宅の庭にポツカリと残された地下壕跡を見た時は本当に驚きました。龍門寺の強制連行犠牲者追悼法要では、幼子も含めた犠牲者の来歴が、遺骨を守ってこられたご住職の読経を通じて語られ、胸に沁みました。しかし政府は、遺骨の返還事業も行わず、愛宕山米軍住宅建設工事で国有地になった旧日本軍の負の歴史遺産である地下壕跡を埋め戻そうとしているそうです。

恩田さんの事故現場を訪問した時に、偶然出会った地元の方が事故の第一発見者で、事故当時の状況や恩田さんの思い出を語ってくださったこともとても印象深かったです。私の住む京都では京丹後市に米軍Xバンドレーダー基地が建設され運用が開始されましたが、すぐさま騒音と交通事故被害が住民を苦しめており、岩国住民が支援にかけつけるなど交流も始まっています。また恩田さんの交通事故現場近くでお見かけした朝鮮半島出身のおばあさんは、今はもう高齢ですが以前からそこで豚を飼って暮らしていたそうです。どんな人生を生きて来られたのでしょうか？時間がなくて少ししかお話できなかったのが残念でした。

2日め午前のミーティングでは金静媛さんのお話を伺うことができました。岩国歴史散歩が終わり、午後からAWCや労働団体が主催する岩国行動2014に2日間にわたって参加しました。全日程が終わってから、岩国行動に参加された韓国人父子と一緒に錦帯橋見物をしながら、(私はものすごい方向オンチなのですが)歩いて六角亭に立ち寄ってみることもできました。歩きながらの「ヒロシマで被爆した人が岩国に逃げて8月14日の岩国空襲でまた被害を受けた」という話に、息子さんが「韓国ではヒロシマへの原爆投下で米国が戦争を終わらせたと言ってきたのに、ヒロシマのあとも米軍は空爆を続けていたなんて！」と驚かれたのも心に残っています。

(永谷ゆき子)

フィールドワークに行く人が、ときおり場所が与える力について話す時がある。私の場合にはある場所に直接訪れ、事前に形成された知識や見解を超える巨大な複合的な経験をやる時、いわゆる「場所のオーラ」を考えてみる。特定の場所が、特別な理由と特別な記憶が絡み合ったところであるためだ。そんな記憶が個人のものではなく、共有された記憶である場合、その場所をもっと特別になり、人にとって一種のオーラを帯びた場所として経験される。そして普通「踏査」は場所に埋められた多くの記憶の層と集中的に出会うよう意図された企画なのだ。

日韓女性史の視点で岩国近現代史を考えてみようという趣旨で企画された2泊3日の岩国近現代史の歴史散歩ワークショップに先立ち、岩国川下地区、人絹町、門前町の一帯で現場の下見に行ってきた。米軍事基地によって日常的な危険性に直面した岩国住民、そして実に戦前と戦後の広島湾の軍事化の核心的な苦痛の環を担当した岩国で、強制動員に、過酷な労働に、苦しまなければならなかった朝鮮人の人生、そして後に展開した朝鮮人の民族教育の経験をたどってみた旅程でもあった。

今回の踏査で、私たちは、朝鮮人と関連した多くの記憶の場所を訪問した。もちろんのこと、記憶の社会的伝授あるいは伝播は決して平等に行われぬ。今回私たちが朝鮮人の環をたどって行った場所は社会的に記念されない、排除された記憶の現場だった。龍門寺で強制動員された朝鮮人労働者たちの遺骨に直面し、現在は痕跡すら消えた岩国朝鮮学校の敷地を聞き歩いて探して発見した。私たちは、朝鮮人と関連した苦痛の記憶、その過去と現在、未来を見た。そして自分たちの新たな記憶を作って帰って来た。

私にとっては格別な調査だった。今回の踏査は、多くの対話で始まって対話で終了した。絡み合った経験や感じを整頓するには時間がちょっと必要そうだ。ちなみに、個性の強いチーム員達と2泊3日をハードに過ごしながら、彼女たちともたわいない話からまじめなテーマまで非常に多くの話を交わした。またこのような機会を作ることができるだろうか。こんなふうには調査チームを作って苦痛の現場に「ともに」行って「ともに」話し考えたその経験はそのまま散逸しはしない。どんな形であれ実を結ぶと思う。苦労したチーム員たちに感謝の意を...

(梁東淑)

